

偉大なアイルランドの詩人W・B・イエイツは、ケルトの吟唱詩人の伝統の研究に取り組むことにより、それを当代の詩にあらたな活力を与え、聴覚的な力点を正しく付与するための方法とした。生涯にわたり東洋、ギリシア、中世の各神話研究にも動しんだ。一九三七年の回想のなかで彼は言っている。「私は、眼のために書かれた詩のあらゆるフレーズを一掃し、そのすべてを耳のために書くにつくられた統語法に引き戻そうと全生涯をかけてきた。(……)『耳のために書く』と私は考えた。そうすれば、詩人は観客の前に立った役者や民族音楽の歌い手さながらに理解されるからだ。私は詩に対して、あらゆるその種の当世流行の好奇心、すなわち心理学に背を向けさせようとしたのである。」(イエイツ「私の劇作概説」一九六一)

——マーシャル・マクルーハン『メディアの法則』、六八頁^①

近代とは散文の時代である。少なくとも、散文というジャンルが韻文というジャンルを大きく押し退けて力を得た時代、それが近代ではないだろうか。ではその押し退け方、その勢威のさまをどのように私たちが捉えてきたのだろうか。それを何らかの危機として捉えてきたのだろうか。そうではなく、むしろあたらしい表現世界の到来として歓迎してきたのではないだろうか。

たとえば明治以降の〈近代文学〉なる概念を成立させた(とされる)言文一致の問題^②。これはまぎれもなく「散文の時代」への日本的展開／転回なのだが、その陰で忘れがちになるのが韻文の行方である。古い、黴臭い

文学の形態として、あるいは少なくとも非実用的な言葉の形態として、韻文を遠ざけてきた〈近代文学〉の径庭がそこにある。(もつとも文学における戦争責任論が韻文的なるものを遠ざける第二の役割をしてきたことも忘れてはならない。) 定型的、形式主義的な言語の様態としての韻文。これに対する形式に拘束されない、より自由な言語様態としての散文、という図式が、暗黙のうちに私たちの中にある。だが、近代文学の展開を単純に韻文から散文への転換として語ることそのものがミスリーディングである可能性が高い。

とりわけ、言文一致の問題は注意を要する。山本正秀が述べるように、「文章を話しことばに近づけ、話しことばを主体として、近代日本人の思想や感情を自由的確に表現する」方法、それが言文一致体に関する一般的な理解であるとして、そこには概念上の一種の振れが存在することを忘れてはならない。つまり、「文」を「言」に一致させること、すなわち書きことばを話しことばに一致させることを指すというわけだが、これが文字から音声へ、目から耳への転移と理解するとまるで逆の事態になる。なぜなら、それまでいわゆる〈声の文化〉(orality)の世界を支配していたのは、じつは「文」の言語であったからだ。言文一致運動が招き寄せた散文の論理とは、「文」の言語からの解放にほかならないとすれば、一義的には「言」すなわち声の言語に向かったことになるはずなのだが、ここに振れが生じるのである。

それは、近代以前の〈声の文化〉を支配していたのが「文」の言語であったという逆説的事実による。たとえば、柄谷行人が〈風景〉記述をめぐって次のように指摘するとき、振れが浮き彫りになる——「人々が『詩歌美文の排列』(柳田国男)にすこしも厭きなかったのは、実際の風景などより「文」の風景の方が現実的だったからである」(柄谷行人『日本近代文学の起源』、五五頁、傍点原文)。まさに「風景」を構造化していたのは「文」の言語であって「言」の言語ではなかった。さらに正確を期すならば、「文」の言語が「言」の言語に一致していたのが言文一致以前の言語状況であったといえるだろう。つまり「言文」ならぬ「文言」一致の言語世界がそこにはあったのである。「文」を主体とする「文↓言」の様態を顛倒し、「言」を主体とする「言↓文」の方向へ

の転換、これこそが言文一致運動という近代散文への展開／転回であった。もっともこのような図式は、水村美苗に言わせれば後づけの理屈となる。

近代以前の人々には、〈書き言葉〉が〈話し言葉〉をそのまま書き表したものだという考えはなかった。近代に入り、ヨーロッパで古典教養の一部となったキケロやセネカの散文は、〈話し言葉〉とは異なった「文語」で書かれているといわれているが、それは〈書き言葉〉が〈話し言葉〉を書き表すものだというのちに生まれた考え方を過去に投影したものの言いかたにすぎない。近代以前の人々は、たとえ〈自分たちの言葉〉で書いていようと「文語」で書くのを当然としていた。

（水村美苗『日本語が亡びるとき』、一六〇—一六一頁）

近代以前の〈声の文化〉を支配していたのは「文」の言語であったと述べた。ここにもう一つの捻れが加わる。それは、「詩歌美文の排列」そのものが「声」でもあったという事実である。つまり〈声の文化〉そのものが「文」によって基礎づけられていたという側面もまた否みがない事実であり、そのことが日本近代文学における言文一致の問題を複雑にしている。水村美苗が指摘するように、「近代以前の人々には、〈書き言葉〉が〈話し言葉〉をそのまま書き表したものだという考えはなかった」のだとするならば、〈書き言葉〉が〈話し言葉〉と等置される近代散文の概念における〈声〉と〈耳〉の問題は、印刷革命に代表される「言語の視覚化」に取って代わられてしまったのである。

その意味で、注目すべきは「言」と「文」の関係よりも言語の「視覚化」のほうである。「視覚化」すなわち印刷革命への弾みを得た言語はどのような様相を呈することになったか。ウォルター・オング『声の文化と文字の文化』（一九八二年）が提示しているように、「声の文化に基づく思考と表現」九点の特徴を反転させれば、散

文の時代の言語状況を推し量ることができらる(3)。定型から自由へ、あるいは「文」から「言」へという近代化の論理では語り尽くせない要素が、この「視覚化」という転換には潜在している。それは、本質的には韻文から散文への移行としてのみ語るのではなく、「声の文化」から「文字の文化」への移行として語られる必要があるのだ。些細な視点の転換のようだが、近代以降の「散文の時代」を招来したのは、けっして表層的なエクリチュールの形態論ではない。そうではなく、グーテンベルクによる印刷革命そのものにほかならず、印刷革命とは言語の本性を聴覚的な経験世界から視覚的な経験世界へ大転換させた動因だったはずである。そのことをきわめてスリリングに示唆したのがマーシャル・マクルーハンであった。

マーシャル・マクルーハンは『グーテンベルクの銀河系』(一九六二年)その他の数多くの著作で、印刷革命の本質を「言語の視覚化」という観点から読み解いて見せた。つまり「散文の時代」の到来とは、言語を「視」の対象すなわち視覚的な対象ととらえ、言語をめぐる感覚・感性的な全体性(マクルーハンのいう感覚比率)を偏倚化するなわち視覚偏向していったプロセスだと指摘したのである。マクルーハンを継承したウォルター・オングは、『声の文化と文字の文化』において、口誦文学(oral literature)という言い方の自家撞着を指摘していた。なぜなら本来、literature という言葉そのものが「文字の文化」を前提とする識字(literacy)にかかわる「文献」の意味であるがゆえに、「口誦の文学」とは、本来相容れない二つの概念の結合であり、捩れであるからだ。

それに倣つていえば、(これは一応仮説にとどめておくが)「近代散文」という言い方も一種の自家撞着ではないだろうか。この本質として言えば、そもそも散文とは印刷革命以降の「文字の文化」によってはじめて成立した近代の一ジャンルを指すのではないか。そしてその成立の背後には、「声の文化」の抑圧という事態が歴史的に秘められている。オングによれば、「声の文化」には「テキスト」はない(七七頁)。「声の文化」の基底を成すのは「テキスト」ではなく「記憶」であり、「固定し、型にしたがった思考パターン」であり、「記憶できるような思考を思考する」ために、技術化された決まり文句や定型性、さらには特有の統語法であった(オング、

五七頁、七八頁)。

これがマクルーハンやオング、あるいは彼らに先行するもしくは彼らを継承する「声の文化問題」(orality problem)をめぐる研究者たちによる問いであった⁽⁴⁾。それだけではない。マクルーハンの説明によれば、これがそがジェイムズ・ジョイスやイエイツを初めとするモダニズム文学の根底にあった問いでもあった。彼らは印刷革命以降の〈文字の文化〉の自明性に抵抗を試みた作家たちであり、そのために実践されたのがさまざま言語実験であった。と、こう理解せよとマクルーハンのモダニズム論は私たちに迫っているのである。言い換えれば、モダニズム文学の中に〈声の文化〉復権の手がかりは潜んでいる。モダニズム文学の先駆者の一人、W・B・イエイツが説いたとおり、彼らは「耳のために書く」試みを続けていたのである。本書のテーマ「反散文論」とは、その意味では、散文とそれを支えている〈文字の文化〉の覇権を問い直す試みであると同時に〈声の文化〉の行方を探る試みである。「反散文論」は詩論でも韻文論でもない。散文とは何かを問い直しつつ、〈声の文化〉の行方を探る、「耳のために書く」試みにほかならない。

【注】

(一) イエイツの原文は、W. B. Yeats, "An Introduction for My Plays," *Essays and Introductions*, London: Macmillan & Co. Ltd., 1961: pp.529-30. 「耳のために書く」の原文は "Write for the Ear". 訳文は、マーシャル・マクルーハン、エリック・マクルーハン(監修)序高山宏、訳中澤豊『メディアの法則』(N.T.T出版、二〇〇二年・原著一九八八年)を拝借したが、一部加筆修正したことをお断りしておく。なお、本書所収のブルース・アレン論文には、「耳の読者になれ」("Be an ear reader")という詩人ロバート・フロストの示唆があったことが語られている。第三部「野生の中へ——石牟礼道子の口承的な文学世界を翻訳すること」を参照されたい。